カンボジア王国「分娩時および新生児期を中心とした母子継続ケア改善プロジェクト」
Project for Improving Continuum of Care with focus on Intrapartum and Neonatal Care in Cambodia (IINeoC Project)

ニュースレター 第5号
2016年12月

初めまして、プロジェクトインターンの上田あかねと申します。10月から3カ月間のインターンも今月までとなりましたので、今号ではプロジェクトの内容と共に、インターンシップでの活動もご報告させていただきたいと思います。

出生直後の即時新生児ケア(INC*1) 研修会　12月20日-21日

コンポンチャム州病院の敷地内にある研修棟（日本の援助により建設）にて、州保健局の主催でINC研修会が開催されました。州保健局のDr.ブンスレン母子保健課長と当プロジェクトの塚田みのり短期専門家が中心となり準備が進められ、保健センターと州病院から12人の研修生を迎え、全員が無事研修を終えました。

「コンポンチャム州における出生直後の即時新生児ケアの研修準備と実施支援」

塚田みのり短期専門家

コンポンチャム州とスバイリエン州にて、出産に関わる全ての医療者がINCを適切に提供するための研修実施を支援することは、当プロジェクトの重要な活動の一つです。今回コンポンチャム州において、プロジェクトの支援による研修の準備と第1回目の研修を実際に実施することが、派遣目的の一つでした。研修実施の1週間前まで、研修を主催する州保健局母子保健課の課長であるDr.ブンスレンが日本に研修に行かれていたため、実質の準備期間は1週間しかありませんでした。しかし、以前に他ドナーの支援による実施経験がある研修だったため、2日間大きな問題が起きることもなく終えることができました。

この研修の特徴は、ほぼ実技のみで構成されていて、繰り返しINCの手技を練習・確認できる点です。今回は経験年数が若い受講者が多く、他の受講者が実技をしている間もその姿を見つめ、手技を覚えようとしている真摯な姿が印象的でした。

INCは基本的な手技であり、特別な道具は必要としません。特に保健センターのような、限られた資材や設備の中でのケア提供が求められる施設で働く医療者にとって、正常・異常どちらの新生児の初期対応も網羅するこの研修は意義あるものと言えます。今後定期的に監督、技術指導を受けながら、ぜひ今回の研修を実践で生かせるようになっていってほしいと願っています。

プレテストを真剣に受ける研修生達

トレーナーによる手洗いチェック

12人が2グループに分かれて、トレーナーの指導のもと実習中

左：研修生たちと研修棟前にて記念撮影

左下：みんな楽しみおやつ休憩

右下：研修終了後の集合写真

*1INC：Immediate Neonatal Care（出生直後の新生児ケア）：出生後最初の90分間で新生児に行うケア。新生児死亡の約半数は出生後24時間以内に起こるが、出生直後の簡単なケアにより多くの命を救うことができるとされる。児をしっかりと拭く、母体との皮膚接触(Skin to Skin)を行う、拍動がなくなってから臍帯を切断する、早期の初回授乳を行う、蘇生の準備をしておくことなどがその内容である。出生時に呼吸をしていない場合の蘇生法のトレーニングも含まれる。

*2EENC: Early Essential Neonatal Care（早期必須新生児ケア）：新生児予後を改善することを目的に分娩時から出生後3日間に新生児に対して行う必須ケア。（カンボジア保健省「新生児ケア5カ年活動計画 – Five-year Action Plan for Newborn Care in Cambodia」の定義による）上記のINCとExpanded INC(早産の管理や新生児の低酸素や敗血症のケア）を含む。

*3OD:Operational District：保健行政区

IINeoCプロジェクトインターン活動報告

活動期間　10月5日～12月30日

上田あかね　（倉敷中央病院　産婦人科）

私は卒後9年目の産婦人科医で日本ではお産、外来、手術と日々臨床医として働いています。以前より国際協力に関心があり今回インターンシップに応募させていただきました。専門用語やプロジェクトの運営、カンボジア人カウンターパートとの接し方など、一から指導をしていただき、大変充実した日々を送ることができました。

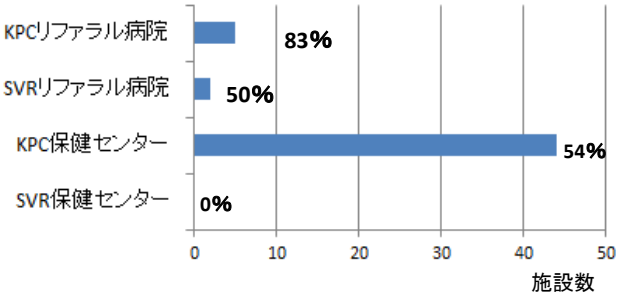
プノンペンは交通事情が悪いこと以外は暮らしやすく、新しい環境での生活も楽しむことができました。やっと慣れてきたところで帰国するのが非常に残念ですが、今後も何らかの形で国際医療協力に関わりたいと考えています。今回の貴重な経験はとても役立つことと思います。まずは日々の臨床に公衆衛生的視点をもって取り組むことから始めたいと考えています。

インターンシップ期間中に行った２つの調査について紹介させていただきます。

1. コンポンチャム(KPC)州とスバイリエン(SVR)州での新生児に対するビタミンKの在庫調査

保健省とWHOによるスバイリエン州での出生直後の即時新生児ケアのモニタリングに同行した際に、国の指針で定められているビタミンK投与を行っていない分娩施設があることが判明しました。母乳育児の新生児では特にビタミンK欠乏による出血（頭蓋内出血など）のリスクが高くなります。そこでプロジェクトサイトである上記2州の公立分娩施設139施設でのビタミンKの投与状況に関して、電話で聞き取り調査を行いました。結果は図１のようになり、両州、特にスバイリエン州でビタミンK投与が行われていないことが分かりました。この結果はコンポンチャム州保健局主催のSeminar on the Development EENC Practice in 2016で発表し、州保健局など関連部署にも報告しました。コンポンチャム州保健局母子保健課長の来年1月からの行動計画に、全ての新生児へビタミンK投与を行うシステムを強化することが盛り込まれており、投与状況の改善が期待されます。

図１　常に新生児に投与するビタミンKがある施設数



2. 国立母子保健センターで実習中の医学生へのアンケート調査

カンボジアは首都プノンペンに国立医学部が一校あるのみでしたが、近年私立医学部が2校開設されています。ただ大学病院が併設された医学部はなく、臨床実習は複数の公立病院で行われます。母子保健センターでも多くの学生を受け入れており、実習中の学生が問題を抱えていないか否かを知るため、アンケート調査を行いました。実習中の学生54人中40人より回答を得ることが出来ました。内訳は、国立大学生が30人、私立大学生が10人で、男女比は27：13でした。実習の満足度は5段階評価で、平均は3.63でした。もっと指導を受けたり、多くの症例を経験したいという希望が多くありました。また実習先であまり歓迎されない、当直中に休憩する場所がない、病院スタッフとの関係性の難しさなどを挙げる学生もいました。

将来の希望科は、母子保健センターでのアンケートのため、産婦人科が多い傾向になりましたが、精神科や病理診断科、腫瘍内科、公衆衛生などを希望する学生もいました。

また、医学部卒業後の就職先を見つけるのが困難であったり、充分な研修が受けられないことなどから将来に不安を持っていると答えた学生が38名(95%)いました。

他の実習病院を見学したことはありませんが、母子保健センターでは、指導医の数に対し学生の数が非常に多い印象を受けました。医学生が将来の不安に悩まされることなく、充実した臨床実習が受けられることは、カンボジアの医療水準を引き上げるためにも重要であると考えられます。

調査結果は学生と母子保健センターの実習関連部署に報告しました。今後の実習の改善に向け、参考にしていただけるとのことでした。

コンポンチャム州保健局主催のSeminar on the Development EENC Practice in 2016でビタミンK調査の結果を発表

上：カンファレンスで症例発表を行う学生

下：コンポンチャム州のメコン川にかかるきずな橋